

日本一ノルディック公開シンポジウム
大学評価をどう活かすか
ー北欧の成功から学ぶー

まとめ及び閉会挨拶

川口 昭彦 大学評価・学位授与機構 理事

(加藤) それではプログラムの最後になります。当機構の川口理事より本日のシンポジウムのまとめ、ならびに閉会のご挨拶を申し上げたいと思います。

(川口) ただいまご紹介いただきました川口です。引き続きご挨拶をさせていただきたく存じます。

本日は、「日本—ノルディック公開シンポジウム『大学評価をどう活かすか—北欧の成功から学ぶ—』」ということで、シンポジウムを開催させていただきました。おかげさまで、昨日までの天候とは打って変わって、非常によい天気にも恵まれて終了させていただきましたことを大変ありがたく、ご挨拶申し上げたいと思います。

本日はお忙しい中にこの会場においでいただきまして、多数の皆さんにおかれましては、長時間にわたりまして活発なご議論をいただきました。特に先ほどもお断りしましたが、ご質問の時間がなかなか取れなくて、最後にだいぶご質問をいただきましたので、多少は留飲を下げていただいたかなと思っておりますが、そのことも含めて感謝申し上げたいと思います。

特に本日のシンポジウムにご登壇いただきました Thune 先生をはじめパネリストの皆様におかれましては、非常に多忙なところにもかかわらず、事前の準備を含めまして多大なご理解とご協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

さて、本日のシンポジウムにおきまして、日本の高等教育機関の評価、あるいはその評価による改善の問題、社会に対するアカウンタビリティの問題、ここに焦点を当ててご議論させていただいたわけですが、皆様、どういうご感想をお持ちになったのでしょうか。私どもの日本の大学評価がどのようにこれから進むべきなのか、あるいはその評価結果をどのように活かすべきか、多少はおぼろげながら見えてきたのではないかと考えております。

我が国の高等教育機関における質の保証、この先導的な役割を果たすという意味においても、今後、私どもが標榜しております評価文化の展開がどのようにいくべきかということを考えるうえでも、今回のシンポジウムは大変貴重な機会になったのではないかと思います。先ほど申し上げましたように、ノルディック諸国は我々よりも5～10年長い経験を持っているというところもあって、今回こういうシンポジウムを開催させていただいたわけです。

まことに私事になって申し訳ございませんが、私がちょうど30年ほど前にハーバード大学に留学していた当時、近くにスウェーデンから来られたご家族がいらっしゃいました。そのご家族と親しくさせていただいて、お互いに家に行っているいろいろな話をしていましたが、その内容を実は私は今、鮮明に覚えております。アメリカ合衆国に我々はちょうどいたわけですから、例えば日本からアメリカ合衆国を見る場合、スウェーデンから日本を見る場合、その話をしていると、日本とスウェーデンというのは文化も地理的にも非常に遠いところにあるのですが、アメリカをどう見ているかということを見ますと、

非常に似通っていると感じました。

そういう意味で、今回、ノルディック・カントリーというのはいろいろな意味で面白いのではないかと、評価も随分おやりだというインフォメーションがありましたので、面白いのではないかとということで、昨年から5か国を訪問させていただき、今年は午前中お話が出ましたNOQAのアンニュアル・ミーティングにオブザーバーとして出席させていただいて、非常に共通点があるのではないかと思います。先ほど会場からもどこが違うのかというご質問がありましたが、確かに内容的には非常に似ております。

ただ、先ほどお話ししましたように、違うところもあり、評価の結果をさらに次に活用しているという意味では、我々日本はこれから学ばなければいけないのではないかとこのことを感じた次第です。ですから、遠く離れていて、文化も違う、教育制度も違うのですが、評価ということを考えてみると、非常に共通な部分があるのではないかとこのことを感じました。そのことを最後のまとめとしてお話しさせていただき、それぞれ皆さん、お帰りになってお考えいただければと思います。

今回のシンポジウムのきっかけとなりましたこととして、私どもの機構の評価事業における今後の展開というものを考えるうえで、今申し上げましたように、北欧が大きなヒントになるのではないかとこのことを感じて、やらせていただきました。これをきっかけとして、さらにこれから情報交換、お互いに経験をシェアするということがこれから重要ではないかとこのことを感じました。

こういうわけで、私どもは今まで北欧5か国の方々とのおつきあいは、かれこれ3年になろうとしています。今後北欧に代表される欧州圏での質保証の取り組みの進展を注視して、いかにそれが重要なのか、また我々の立場から、アジア圏でどのような質保証を行い、よりよい知的な社会に貢献することができるかということを考える良いチャンスではなかったかと考えています。

しかしながら、今回のシンポジウムはきっかけの一つにすぎません。今後ともそれぞれの地域や国、社会、あるいは国境を越えたステークホルダーに対してよりよい地域社会を提供するための活動をそれぞれ協働して取り組んでいくということが重要であろうと思えますし、両地域あるいは関係国が継続的な協力関係を持っていくことが大切であると確信している次第です。

このような意味で、これは私の勝手な意見かもしれませんが、今申し上げましたように、非常に類似したバックボーンを持っている両地域が高等教育分野で手を取り合って連携を進めていくということは非常に有意義であると思っておりますし、今回のこのシンポジウムが両地域の友好を促進し、今後の両地域の高等教育分野の発展に資することになれば、私どもこのシンポジウムを企画した者として望外の喜びです。

さて、今後私ども機構の営業活動をさせていただきたいと思っております。機構ではちょうど2か月先、11月末に今度は中国の大学評価関係者をお招きして、同じようなシンポジウムの開催を既に計画しております。これは昨年度から当機構では、『シリーズ「アジアに

おける大学評価』と題しまして、アジア地域の高等教育の質保証の問題をアジアという枠組みで少し話し合ってみたいということで、昨年は「台湾における大学評価」ということでシンポジウムを開催させていただきました。今年は第2回として中国との交流を深めたいと考えています。

今回は、中国における高等教育の質保証についての講演会を実施しますが、今後は国内のみならず、あるいは中国のみならず、アジア地域の先導的な高等教育の質の保証機関としての一翼を私ども機構は担いたいと強く考えておりますので、ぜひ皆様のご協力とご理解をいただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

最後に、もう一度お礼を申し上げたいと思います。本日、ご講演いただきました北欧5か国の皆様、日本の高等教育関係者の皆様、この会場にお越しいただきました皆様に心から御礼を申し上げまして、私の挨拶にさせていただきますと思います。本日はどうもありがとうございました。

(加藤) 本日は、「日本—ノルディック公開シンポジウム『大学評価をどう活かすか—北欧の成功から学ぶ—』」にご参加いただきまして、誠にありがとうございました。以上をもちまして本シンポジウムのプログラムは全て終了しました。どうもご参加ありがとうございました。

なお、お帰りに際しまして、アンケートにご協力いただきますようお願い申し上げます。ご記入いただきましたアンケートは出口でスタッフが回収させていただきますと思います。また、同時通訳のレシーバーについてはお席に置いたままご退出いただければと思います。なお、本日のシンポジウムのレセプションを用意しております。2階のレセプションホールにおきまして5時15分より開催したいと思っております。会場の皆様方もぜひご参加いただければと考えております。レセプションに参加されずにお帰りになる方につきましては、お忘れ物なきようよろしくお願いいたします。

本日は長い間どうもご清聴ありがとうございました。